



栗原小だより

新座市栗原 1-5-1 ☎042-473-7070

HP <https://e-kurihara-c-niiza.edumap.jp/>



～学校教育目標～
よく考え学ぶ子
心のゆたかな子
たくましい子

令和7年度3月号
令和8年2月27日

プラスの言葉掛けからはじめよう

校長 古澤 健史

【あきらめないことが大切と言うけれど】

ミラノ・コルティナ2026オリンピックで日本選手の大活躍が、連日ニュースで伝えられていました。私も多くの感動をもらいました。

その中で、一番心を動かされたのは、フィギュアスケートペアの三浦璃来さんと木原龍一さんの「りくりゅうペア」が、大逆転で金メダルを獲得した後の会見です。木原さんは、前半のショートプログラムで大きなミスをして、「もうダメだ。僕は諦めてしまった。」と言っていました。また、ミスを引きずり次の日の練習中も何度も涙が止まらなかったことを明かしました。あきらめないことが大切だと言われますが、一生懸命誰よりも努力を積み上げて実績をあげてきた人でも、うまくいかなかったときに絶望し、あきらめ、自分だけでは立ち直れないことがあるのです。それを再び立ち上がらせたペアの三浦さんやコーチ、日本チームの仲間などからの思いのこもった言葉や行動を知り、とても幸せな気持ちになりました。あきらめないことが大切なのではなく、あきらめないように支えてくれる仲間がいることが大事だと思いました。

【気になったマイナスの言葉】

たくさん感動をもらった一方で、今回のオリンピックでも審判や採点に対する不平不満や思うように活躍できなかった選手に対する報道やSNSでの誹謗中傷の問題が大きく取り扱われました。その中で特に気になったのが、「メダルを盗まれた」という言葉です。

昔からオリンピックに限らず、様々な競技で人が審判や採点をしていることから、誤審や採点への不満が取り上げられることはありました。そんな中で逆に選手の人間性や素晴らしさを知り、記憶に残っていることもあります。柔道の篠原信一選手は、世紀の誤審と言われ、後に国際柔道連盟も誤審を認めて、ビデオ判定導入に繋がった

試合で「自分が弱いから負けたんです。」と気丈に振舞いました。

なぜ「メダルを盗まれた」が気になったかということ、従来の審判や採点への不平不満を超えて、その判定や採点によってメダルを獲得した選手までも批判の対象として攻撃しようとする感じがしたからです。

今回も判定や採点に不満を感じつつも選手同士は、お互いを称え合う姿が多く見られましたが、このような報道の言葉が、選手同士がリスペクトし合う光景をも壊してしまうのでは思いました。

【プラスの言葉が溢れる学校に】

さて、本校では「プラスの言葉掛けからはじめよう」ということを教職員は心掛けています。休み時間後、教室に入った時に教室が騒がしい、「静かにしなさい。」と注意をするか、教室を見渡し、静かに準備をしている児童を見つけ、「しっかり準備をできて素晴らしいね。」と褒めることができるか、叱る機会を褒める機会に変えられたらいいなと思っています。

先日、6年生が卒業式に向けて卒業生代表の言葉のオーディションを行いました。本校では、毎年希望者を募り、希望者多数の場合はオーディションで決定しています。今年は例年を大きく上回る11名の立候補がありました。さらにどの児童の態度や立ち振る舞いも素晴らしいものでした。そして何より、それぞれが作成した言葉が秀逸でした。学校でのかけがえのない思い出や自分の成長、支えてくれた友達、両親や家族への感謝の思いを自分の言葉で綴り、立派な態度で読み上げていました。学校生活は良かったことばかりでなく、辛かったことや嫌だったこともあったはずですが、彼らの発する言葉には、聞く者を引き付けるプラスの言葉で溢れていました。

6年生は、残り1か月の中で、学校や後輩たちにプラスの言葉で思いを託し、引き継いでいってけると期待しています。